

世界No.1 特許庁へ！

巻・頭・言

平成26年度 特許庁技術懇話会 代表委員 蔵野 雅昭



今年は、ついに特許庁の10年来の目標であった審査順待ち期間11ヶ月以内（FA11）という特許庁長期目標が達成されました。一審判官として言わせて頂ければ、滞貨の山との長い闘いが終わった今、一休みを期待する気持ちもありましたが、今年は、更なる目標、すなわち、「世界最速・最高品質の特許審査」の実現に向けた新たな長期計画を開始する最初の年となりました。いわば、審査処理のスピードについては世界最速を2連覇、3連覇しつつ、品質面でも世界最高を獲得して2冠王を目指すことになりましたが、では、これをどのようにして実現すればよいのでしょうか。丁度10年前、非常に困難な目標に思えたFA11に向かって走り出した時以上に困難を感じている審査官・審判官も多いと推察致します。

ところで、私が入庁した二十数年前を思い出しますと、少なくとも自分の担当分野においては自分が最速で最も正確な審査をする審査官であると考えていた者も少なくなかったのではないのでしょうか。FA11が達成された今、そのような審査が行えれば「世界最速・最高品質の特許審査」が達成できるはずで、それでは、どのような手法で審査がなされていたかといいますと、まず各審査官が公開公報（紙）などの技術資料を自ら集め、分類・整理して担当する技術分野における審査用の資料を作成し、これに基づいてサーチを行うというものでした。そうすると、担当技術分野が変わらない限り同じ資料に基づいて繰り返しサーチをすることになるので、その分野に精通した審査官は、短時間で最適な引例を発見できるようになります。また、これを繰り返すことで精通している技術分野を広げ、さらには他人の精通分野までも熟知するに至り、あたかも全産業分野に精通しているかのような“名人”と呼ばれる究極の審査官もおりました。

一方、経験が浅い審査官は、熟練審査官や名人のようにはいきませんが、とにかく審査資料を“総なめ”すれば理論的に

は熟練審査官と同じ引例を発見できるはずであり、当然のように“総なめ”を実行することで“最高品質”の審査を行っていました。このような経験を繰り返すことが担当技術分野に精通し、“最速”を達成するための研修過程でもあったといえます。

今、各審査官は、膨大な審査資料を時間の許す限りサーチし、過去のサーチ結果を活用し、必要に応じて同僚や上司と相談するなど品質を高める様々な努力をしておりますが、これは上記の経験の浅い審査官が“総なめ”しようと努力しているところに似ているのではないのでしょうか。より大勢でサーチをすればより“総なめ”に近づくことは自明ですし、より多くの知識を総合すればより品質の高い審査を期待することも自明です。したがって、今実施していることを更に発展させ、どのような技術分野の案件を誰が担当しても、担当審査官は、必要な知識や審査経験を有している者を過不足無く集めることができる。そのような究極の審査手法を全審査官が習得したとき、世界最速・最高品質の特許審査が実現するのではないのでしょうか。

究極の審査手法へと発展させるためには、誰もが互いにどのような知識や審査経験を有しているかを熟知していることが前提となりますので、まずは日頃からより多くの人と懇親を深めるなど、審査経験を具体的に伝えあう機会を増やすことが重要になります。特技懇は、このような機会を提供することで、世界最速・最高品質の特許審査の実現に貢献できるようにしよう。

会員の皆様、是非、特技懇も活用しつつ懇親を広め、世界No.1 特許庁を実現しましょう。そして、世界No.1 審査官が集う懇親会として、世界中からお客様を招待し、盛大に特技懇パーティーを開催したいものです。

本年度も特技懇をどうぞよろしくお願い致します。